

「性同一性障害」カテゴリーの断面

A cross section of the category of “Transgender”

飯島 彩音¹, 鄭 暎恵¹, 銘苅 純一²

¹人間文化研究科現代社会研究専攻, ²人間生活文化研究所

キーワード: 性別規範, 性同一性障害, 医療化, カテゴリー, 性別違和感

1. 研究の目的

1990年代後半に台頭した性同一性障害という概念は、「身体の性と心の性の不一致」に苦しむ人々をさす医学用語として誕生し、2000年代前半にかけて広く社会的にも認知されるものとなった。

わずか10年ほどの期間で社会的に広く知られることとなった理由には、「心は男(女)なのに間違った身体に生まれてきた」という説明により「心身の性の不一致」の解消を身体治療に求めるといった説明図式が、社会的な「常識」に沿うものであり、分かりやすかったことが推測される。

だが、ここで使用される「心の性」とはなんだろうか、心身の性が一致していなければ「社会的な苦痛」が存在するのはなぜか。それに対して身体的な治療をするのはなぜか。

本研究は、「性同一性障害」が広く認知されるにいたったプロセスを、社会的な性別規範との親和性において説明することを目的としている。

すなわち、性同一性障害という概念が医学によって編み出された背景や言説構造を分析することによって、性同一性障害という「特殊」ではなく、日常において当たり前とされている社会における性別規範を照らし出すことを目的としている。

また、医学的枠組みとして作られた性同一性障害が、当事者や一般社会によってどのように捉えられ、概念化されているのかについても検討する。それによって、医学言説が当事者の自己意識に与える影響を検討することもまた、目的の一つである。

2. 活動実施報告

本研究では、性同一性障害を「公」に医療化したものとして、1996年に発表された「埼玉医科大学倫理委員会答申」を主に分析対象とし、その言説を成立させているために動員されている「常識知」、すなわち社会的な性別規範の姿を検討した。

「倫理委員会答申」を分析対象としたのは、現在に至るまで、＜性同一性障害＞は「倫理委員会答申」の論理に基礎をおいて成り立っており、かつ、根本的な検討があまりなされていないからである。

その結果、「倫理委員会答申」は性別規範を無条件に前提とした上で性別について説明をしていることが見てとれた。具体的には、①性別は外性器によって決定されているべきこと②見た目の性別が外性器の形状の性と一致していること③人は決められた性に従った見た目や振舞いを求められていること④同性愛が禁じられていること、である。この背景には、ジェンダー、身体、セクシュアリティをすべて複合させ、異性愛制度に導いている社会構造があると言えるが、このような社会的な観念が、医学的な言説に影響を与えながら、疾患概念を構成している現状が浮かび上がってきた。

「倫理委員会答申」は、性別違和を「脳の性分化」の「行き違い」であり、生物学的な性分化にかかわっているものであるという論理構成を採用することで、身体に対する手術を正当であるとした。これにより“あるべき当事者”の姿を、“当事者コミュニティ”に生み出したことも、“当事者”言説の変遷を追うことにより浮かび上がってきた。

つまり、答申の言説を内面化した結果、性別違和をすべて身体違和と認識し、身体治療を選ぶ人がいる可能性や、社会的な性別役割に対する違和感を訴える声がますます社会に理解されがなくなる可能性があることを指摘した。

一般社会には分かりやすい性同一性障害のイメージが、社会的な性別規範を含み込みながら、＜男＞か＜女＞というカテゴリーに自己同一化する意志のある「真のTS(トランスセクシュアル)」と、そうではない「女装」「おかま」などの「逸脱」を分割し続ける力を持つ。性別違和を身体に結び

つけ、個人的なものにしない限り、「逸脱」の位置におかれる構造があることも、本研究から見えてきたことである。

性別違和感は、性自認と他者からのまなざしの間の不整合とも言う。＜男＞＜女＞のどちらかのジェンダーに対するアイデンティフィケーションをし続けてはじめて、他者承認の回路が得られるのが、「性別の自己決定」の現在の限界であろうということが、本研究から見えてきたことである。

3. 研究目標の達成状況

当初は、「性同一性障害」という概念自体が含む困難と、「性同一性障害」という概念にさらされる“当事者”内部の自己のあり方を包括的にとらえ、「自己」と「概念」との関係性について考察することを目標としていた。今年度の研究では、その切り口を明確にするため、性同一性障害の概念の成り立ちやその問題点を浮き彫りにした。しかし、個人の内部において、性別違和がどのような位置を占めているのかについてのミクロな観察や考察ができなかったので、目標をすべて達成したとはいいがたい。

4. まとめと今後の課題

本研究では、性同一性障害が医学によって序列を持ちながら概念化されたことの影響が見えてきた。一つは、医学的な言説が、既存の性別規範を色濃く反映していたことである。もうひとつは、そのような医学言説に拠る形での“当事者”アイデンティティの形成が存在するということである。

今後の課題としては、個人が性別違和を覚えるから、それをどのような社会的な言説やモデルと重ね合わせ、また、自己の内部においてどのような重みを持つものとしてとらえるのか、その変化はどのようなものがあるのかをミクロに調べることによって、ジェンダー・アイデンティティのアクチュアルな面を探ることがあげられる。